

壁は越えたい自分 黒澤明監督の『生きる』



山中 崇氏

俳優

チョツと太めの容姿がコンプレックスの少年時代
なるべくなら目立たず生きていきたいというスタンス
高校の文化祭「キジムナーF」が演劇への第一歩
黎明期は「やりたい」決意とエネルギーの素晴らしさ
やりながらやり続けることの難しさを知る

1978年生まれ 東京都出身。東京経済大学コミュニケーション学部卒業。
岡本太郎の『自分の中に毒を持って』に刺激を受け芝居の道に進むことを決意。
舞台では、野田秀樹、鮎屋法水、松本雄吉ら演出家の作品に出演。映画『松ヶ根
乱射事件』でクセのある男の役に挑戦、以降はクセのある役のオファーが増える。
2013年、連続テレビ小説『ごちそうさん』での室井幸齋を演じて当たり役となる。
その他、NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』『おんな城主 直虎』、連続テレビ小説『ち
むどんどん』、スペシャルドラマ『洞窟おじさん』、土曜ドラマ『パーセント』な
ど、テレビ、映画、舞台など多数出演。なくてはならない個性的な脇役として存在
感を発揮している。5/24公開の『三日月とネコ』にも出演中。

常に立ちほだかる
中学時代胸を打たれた

早見和真氏

小説家

1977年生まれ 神奈川県出身。
2008年『ひゃくはち』で作家デビュー。2015年『イノセント・デイズ』で日本推理作家協会賞（長編および連作短編集部門）を受賞。2020年『店長がバカすぎて』で本屋大賞ノミネート、同年『ザ・ロイヤルファミリー』で山本周五郎賞とJRA賞馬事文化賞を受賞。近著に『笑うマトリョーシカ』『八月の母』などがある。母親の視点で高校野球を描いた最新作『アルプス席の母』が、数多くのメディアに取り上げられ、早くも3刷となるなど大きな反響を呼んでいる。また、1995年の渋谷を描いた『95』が、テレビ東京開局60周年連続ドラマとして、高橋海人主演で放送中。

朝ドラ出演で空気が変わり広がる世間の反響も
しかし人はすぐに忘れると冷静な自分がある
現役でいる為苦しみながらも自分を常に更新していききたい
食べていけるといふ確信は今もない
原点は『待て待て 雪が降ってからの方がよい…』

「なりたい何か」が なかつた子ども時代

早見 今日は同い年で、役者の山中崇さんを指名させていただきました。宜しくお願いします。

山中 こちらこそ宜しくお願いします。

早見 僕は『松ヶ根乱射事件』という映画をきっかけに、俳優としての山中崇さんを認識しました。6年程前に『イノセント・デイズ』という僕の小説がドラマ化した際、はじめて現場でお会いしたんですね。何か印象に残っていますか？

山中 その時はあまり「同い年」という意識はなかつたですね。作品に参加するにあたって原作を拝読し「こんなに面白い本を書く人がいるんだ」という印象が強くて。実際現場でお会いできた時は、ほぼ同じ時間を生きている筈なのに、こうも違うのか……と。物語は女性の死刑囚が主人公で、そこに関わりのある人達の群像劇なのですが「どうしてこんなに様々な人間を描けるのだろう」と、とにかく驚きましたね。



山中 崇氏

早見 前述の『松ヶ根乱射事件』は、決してお金の掛かっている映画ではないだろうと思いつつも、同世代の俳優さん達が必死にスクリーンの中で生きていく感じが印象に残っています。

「あの時の、あの人だ」というのが最初の印象でした。『イノセント・デイズ』には「八田聡」という役で出ていたのですが、あのキャラクターは章の中の主人公にしている程、思い入れがありました。監督の石川さんも僕らと同い年ですが、海外で活動されていた方なので、当時日本の芸能界をあまり知らなかつたんですね。固定観念とか先入観がなく、面白いキャストイングをしていく人だなと思つてました。中でも、八田聡に山中さんをはじめ

込んだのがすごく印象に残つていて。山中さんは「八田聡」という役をどう読みました？

山中 どうだったかなあ。セリフなどは自分も言いそうだなとか、自分のポジションというのはいくらかもと改めて思つたり、自分に近いものを感じましたという記憶があります。

早見 その後、山中さんとは本当に個人的にお付き合いをさせていただくようになりました。やっぱり作中の「聡」っぽいんですよね。半歩引いて物事を見ていく感じとか、やっぱり石川さんは凄かつたなと思います。

山中 ドラマとしての本の仕上がりも面白かつたのですが、その役をもっと探りたくて、撮影前に原作を読ませて

もらいました。この小説のエネルギーというか、密度が濃くて、夢中になつて読み切つてしまいましたね。

早見 物心がついて、最初に思い描いた夢みたいなものは何でしたか？ ご実家は練馬のどんかつ屋さんですよね？ 将来、自分も店を継ぐというようなイメージはあつたのですか？

山中 店は「長男が継ぐものだ」という家の雰囲気があつたので、弟である僕は公務員にという空気を感じていて、小学生の頃から塾に通つていました。

早見 お兄様は塾に行かなかつたの？

山中 そうですね、運動系のことはやつていましたが。それで、確か僕は「弁護士になる」と言つていたんです。そう言えば親が安心するから。弁論というか「言葉」を扱う仕事や、人を救うことが何となく「カッコいい」と思つたのでしよう。その一方で、小学生の頃は剣道も習つていたので、卒業アルバムには「将来の夢は剣道の選手」と書いた気がします。いずれにしても、何かへの憧れや強い意志はなかつたと思えます。

早見 剣道も弁護士も、どちらかというと降つてきたものですね。どんな

小学生でしたか？

山中 肥満ではないけど腿と腿が擦れる程太目で、内腿が擦れて赤くなるのがすごく嫌でコンプレックスでした。小学校2年〜3年の頃にはお風呂に入る時に、独自に編み出した「塩揉みダイエット」をしていました（笑）塩で真っ赤になってヒリヒリしたり、顔にラップを巻いてお風呂に入るとか、もう、とにかく痩せたかったですね。

早見 ちなみに僕も大肥満児だったんですよね。当時肥満児だった2人が今、こんなカリカリになって（笑）

山中 それに、モテる男子は髪のがサラサラなので、床屋さんに行つて「まっすぐな感じ」とお願いしたことがありました。でも、もちろん真っすぐにならなくて。スポーツ刈りにしてもクネクネですつと悩んでいて、後になって「あ！俺はくせっ毛なんだ」とようやくと気づきました。

早見 僕は逆にサラサラで、それがコンプレックスでしたね。

山中 そう、でも応援団長とか嫌々ですがやらされたことはあります。な

るべくなら目立たないように生きていきたいというスタンスだった気がします。

早見 勉強はどんな感じでしたか？

山中 中学までは授業で1回も寝たことがなく、1番前で授業を受ける真面目な生徒でした。高校に入って、学校をサボることに慣れたのかな。

受験での挫折が 役者への入口に

早見 高校は第一志望の所に通えましたか？

山中 中学2年の時、年に1回東京ドームで試合をしていたアメフトリーグ「NFL」の試合をテレビで観て、「何

だ、これ！カッコいい」と感動して憧れました。好きな将棋にも似ているし。

早見 モンタナ・フィーバーの時ですよ。

山中 そうです、ジョー・モンタナ。それで高校に入ったら絶対やるうと思つたのですが、頭のいい学校にしかアメフト部はなくて。当時、某大学の付属校にアメフト部があつてそこを目指したのですが、落ちてしまつて

……。

早見 万が一、その某大学付属に受かつていたらアメフト部に入つてた？

山中 入つてたとは思いません。

早見 そうしたら劇的に違う人生になったかもしれませんね。

山中 そうですよ。中学時代に同じ



早見和真氏

塾に通っていた同級生が他の学校でアメフトを始めていて。ある時その子と再会したら、性格も外見も全て変わつていて戦闘的になっていたというか。アメフトはこんなに人を変えるのかと。僕も確実に変わつていったと思ひますよ。

早見 高校時代アメフトをやつていて役者になつた人っていないさそうですよ。何ていうか、多かれ少なかれ役者になる人にもある種の屈託がある気がします。たとえ王道気質な人であっても。アメリカンスポーツはそういうものの全部が取つ払われ、自己肯定感が高められるから、やっぱり今の山中崇は生まれてなかつたような気がします。僕は希望した高校の野球部に入りましたが、あの時の環境に対して未だに屈託を抱いています。30歳ぐらいになつて、あの頃に悪口を言っていた奴らが、突然監督とゴルフに行つたりするので、「いやいや！みんないつ許したの？」って（笑）でも、あの頃に今でも拭えない屈託を抱かせてくれたから、この屁理屈早見が生まれたのは間違いないと思う。小説家になる原体験だつたというか。今の自分を全く肯定していないので、だから「おかげで

今の僕がいる」みたいなことを言うつもりはないですけど、少なくとも人生は違っただろうな。これは僕の持論ですが、「今を頑張れば未来を変えられる」というのは通説としてあると思いますが、むしろ「今やっていることによつて過去の意味合いを変えられる」という思いの方が強くあります。山

さんが某大学附属を落ちてそのまま腐っていたら、落ちたことを未だに恨む人生だったかもしれない。でも、そこから役者になったという未来のおかげで、過去の意味合いを変えられたのではないかなって。

山中 当時はムカついていたのに、何年後かには赦せたり、今の自分を形作ったとプラスに捉えたり、そう思えるようになったのはいつからですか？

早見 正直、僕は未だに赦せてないと思います。赦せていないから今の自分がいるというか。だから「おかげさまで」なんて思っていない。でも、本当に野球を赦せていなかったら、たとえば最新刊の『アルプス席の母』は書けていないし、野球というテーマに向きもしなかっただろうと思いますよね。それと「こんなへソ曲がりややこしいのが教え子にしていることは悲劇だ

よな、監督にとつて」という気持ちもちゃんとあります（笑）。話を戻しますが、ではアメフト部のない高校に入る時のモチベーションは？

山中 当時の僕はプレッシャーに弱くて、テストが始まるとお腹が痛くなる。ちよつと精神的に追い詰められていて、中学の先生に「共学の方がいい」と言われ、何とか都立高校に受かって

ホツとしました。入学してからは何部に入るか考えましたが、スタート地点が明らかに違うので野球は絶対レギュラーになれない、中学は軟式テニスだったので高校から始めてもレギュラーは無理、そこで選んだのがポータ部でした。

早見 練馬の高校でポータ部があったのですか？

山中 珍しいですよ、顧問の先生がポータ好きで始まったらしくて。埼玉県の戸田に練習場があつて、土曜日に自転車で行ってました。1964年の東京オリンピックの時ポータ競技の為に造った漕艇場が川の横にあつて、その隣が戸田の競艇場です。振り返れば「将来」というものに対していい加減でした。未来に対してピントが合った時期だったかという

と、多分違つたと思います。それなりに楽しかったですけどね。

早見 ポータが未来に通じているという感覚はなかったのですか？

山中 それはなかったですね。
早見 では、いまの山中さんに通じる体験は？

山中 高校の修学旅行が沖縄で、沖縄について勉強する為の実行委員をやりました。その委員会のメンバーで沖縄の戦争にまつわる劇をやることにもなつて。「脚本を書きます」という女子生徒がいて、その脚本はものすごく登場人物が多かつた。僕は裏方をやるつもりだったのに、ひとり1役やらなくってはならなくて、人前に出て演技をするのは絶対に嫌だったのに……。沖縄に住むいい妖怪キジムナーAからHの中の「キジムナーF」役をやることになつたのです。

早見 あまり主役つぽくない役ですね（笑）
山中 本番に向けて皆で大道具の準備をしたり、リハーサルをやっている光景を見たりしているうちに「全員でひとつのものを創るのは面白いかもしれない」という気持ちをはじめ芽生えて。さらにその時、自分の声が体育館

の後ろの方まで届いたのをいろいろな人から褒めてもらえたんですね。で、僕の中でのモチベーションがチヨット来たような感じもあつて（笑）

早見 キジムナーFがそんなに目立つたということ？

山中 当時の山中少年には驚くような風が吹きました。「あれ？ 隣の隣のクラスの女の子とちよつと目が合った気がするぞ」みたいな（笑）。完全な妄想かもしれませんが、風が吹いたんですよ。

早見 その成功体験をきっかけに役者を目指した？

山中 ある意味ではそうかもしれませんが。大学に向けて受験勉強をする時にふと思つたことがあつたのです。受験して、受かつて、卒業して、就職……って、あれ？ 次は定年？あれ？僕の人生これで終わり？そうよぎつた瞬間がありました。

早見 あえて世代論で括ると、僕ら「団塊ジュニア」と言われるところの人間が共通して抱くものですよ。ある種サラリーマンで安定することを否定する世代というか。でも、僕の親父は完全なサラリーマンで「絶対にこんな生き方をしてたまるか」と思いやすい立

場ですが、とんかつ屋のご両親を見ていてもそういう感覚に陥るものなんですか。

山中 「行つてきます」という父の背中を見たことがないので、たしかに思い描きにくい環境だったのかもしれない。僕の場合は環境というよりも、ちょうど文化祭のことがあって、大学に入って、サークルでとりあえず演劇というものに触れてみようかなというところから始まっています。でも日芸とか演劇専門の学校に行くとは思っていませんでした。そこまでの決断をしてみようと後戻りできない気がして怖かったのかもしれない。

早見 そもそも大学の第一志望はどこだったのですか？

山中 当時できたばかりの某大学の総合政策学部でしたね。世代的に環境問題というのがあり、僕自身にも環境問題をどうにかしなければという使命感がありました。毎日牛乳パックを洗ってリサイクルボックスに入れて「環境エコ」だからいいことだと思っていたのですが、ふと、「この小さな1歩がどれだけ環境を変えられるのだろう、もっと大きなことをしないとオゾン層の破壊は止められないぞ」と。

早見 すごい正義感(笑)

山中 それで、通っていた塾の先生に、「将来、地球環境を変えたいと思っていて、その為にはどの学部に行った方がいいのか、そしてどういう仕事に就いたらいいのか」と訊いたんです。そうしたら「ああ、それはもう官僚になるしかないなあ」と。「官僚になるにはどうしたらいいですか？」と尋ねたら、「官僚になるには東大だな」と。今思うと、かなりザックリですよ(笑)

早見 でも、まあ、正しいことを言ってますけどね(笑)

山中 当時の僕の学力では東大は到底無理。頑張れば叶うというレベルでもなかったけれど、どうしても環境問題に関わる仕事がしたくて。調べていくと、総合政策学部に行き着いたんです。

早見 でも、受からなかった。つまり、付属の高校も含めたら2回連続で某大進学蹴にされた人生ですね。ある種その大学が生み出した役者ということか、山中崇という人は。

山中 確かに(笑) 結局滑り止めで受けた大学に進学したのですが、他に受けていた早稲田の不合格通知が来た瞬間に浪人してでも行きたい、来年に向

けて頑張ろうと勉強を始めたところ、父から「浪させるお金はない、受かった学校に行きなさい」と言われて。

早見 それはやはり分岐点ですよ。早稲田に行つても舞台はやってたのかなあ。

山中 当時、早稲田の演劇研究会はすごく盛んだつたのでやってたかもしれないですね。

早見 あの頃、堺雅人さんの舞台を観たのを覚えています。

山中 正に堺さんが僕の何年か上の先輩で、もう「超スター」でしたから。他所の大学でも名前はきこえていたの。入った大学のサークルで演劇をやることには迷いはなかったですね。

早見 当時の山中少年から考えたら結構勇気のある第一歩ではないですか？

山中 そうかもしれないね。映画研究会に行こうか演劇に行こうか迷っていた時に、新人生の勧誘よりも僕のが持ちを優先して考えてくれる人に出会って演劇に決めました。

1日でも長く

現役で居続けたい

間に、映画とか舞台上に他人より多く触れてたんですか？ 僕の場合は『グーニーズ』や『ゴーストバスターズ』『里見八犬伝』などが印象に残っています

が、記憶に残ってる作品は何ですか？

山中 同じようなものですよ。1つハッキリと覚えているのは、ある時中学の授業で黒澤明監督の『生きる』を観させられたことです。いくら名作であつたとしても、授業となると義務感で、嫌々じゃないですか。しかも白黒で、古臭くて、主役は志村喬さんだし(笑)。今はとても尊敬する偉大な俳優だと思つていますが、当時の僕にはそれがわからなかった。でも、観ているうちにすごく面白くなつてき

ました。映画が素晴らしいもの、という原体験はそれかもしれません。それ迄はハリウッド映画で「派手なものこそ映画だ」みたいな感覚でしたが、娯楽の1環みたいな感じで色々観てました。が、あんなに胸を打たれたのは『生きる』が初めてだったと思います。

早見 僕が最初に黒澤明をいいと思ったのは大学1年ぐらいだったから、そう思うと早いですね。

山中 たまたま出会えた作品ですが、

その後の何かには繋がらず点のまま終わっています。

早見 今振り返ると、ということですね。僕は大学時代にかんりの数の本を読んで、浴びるように映画と舞台を観て、いわゆる文化的なるものに触れようとしてきました。山中さんは演劇サークルに所属してどんな日々でしたか？

山中 部室と稽古場と本番のホールで過ごした印象しかありません。それくらい演劇にハマりました。

早見 最初の舞台は？

山中 大学の古い建物の3階だったかにあった小ホールで、昼休みにやった20分の劇でした。40、50人くらいしか入らない集客室みたいな所で「七代目ドラえもん」という役をやったんです。**早見** 「キジムナード」から「七代目ドラえもん」……。

山中 世襲制で、自分でお腹に四次元ポケットを描いて「どこまでもドア」を出して、どこまでも、どこまでも、開けたらドア、という使えないドアを出して「お前、使えねえな」というオチ……。(笑)

早見 良く覚えてますねえ(笑)主演？
山中 男4人の芝居でそれぞれに見せ

場があつて。あとから「山中が皆の足を引っ張っていた」と言われたんですが、自分の感覚だと凄くウケたという印象で。「面白かったよ」などと友達からも言われましたし。その時の打ち上げも忘れられません。飲み過ぎて朝、国分寺の路上で寝てしまったんですよ。車が通るから危ないと言われても「俺はここで寝る、動けない！」と僕が言つて、先輩が「じゃあ、俺も一緒にここで寝てやる」というよく分からない感じでした。

早見 いい時代のいい話ですね(笑)達成感が伝わってきます。
山中 ポロポロ泣いて「先輩、お世話になりました」「皆、ホントにありがとう」とか、言つたのも覚えてますね。**早見** でも、周囲の評価はその4人の中で一番手だったわけですよ？

山中 その訳の分らない自信(笑)は何でしょうね。みんなの足を引っ張っているのに。
早見 僕もデビュー作の『ひやくはち』書いている最中は「俺が世界で一番面白いものを書いている」と本気で思っていましたよ。それなのに自分の本が書店に並んだ瞬間に「あ、ヤバイ。偽物なのがバレた」という感覚に陥つて。

周囲が見えていないからこその変な無敵感がありますよね。

山中 先程の男4人芝居で、当時の僕は自分こそが「主役」だと思っていました。振り返れば、4人それぞれの物語でドアがあるけど出られない、今の自分の立ち位置に疑問を持ちはじめ、「外の世界」に出ようとする話なんですけど。同級生が書いた、ナンセンスコメディでしたね。

早見 それが大学4年間での一番の成り上がりですか？ それよりもっと大きい舞台が山程あつたんですよ？
山中 いや、振り返って一番鮮明に覚えているのはその最初の舞台です。自分の意志で立つた初舞台でしたから。

早見 就職活動はしましたか？
山中 1日だけやりました！サークルの人達がある日突然スーツを着て、「あ、お疲れ様です」みたいな瞬間があつたんです。僕は全くそれが理解できなかった。どういうモチベーションで就職するのだろうという疑問があつて。

早見 先輩達はどうでしたか？基本、僕らの世代はフリーターが「是」とされた世代でしたよね。先輩達も同じように飲んだくれてたのに、皆さん普通に就職していったんですか？

山中 そうですね。大学まで行かせてもらつてのだから就職する、みたいな流れだったと思います。僕自身も親戚の空気や親に対する思いもあつて、スーツを着て東京ビッグサイトの合同説明会に行きました。
早見 何を感じました？
山中 合同説明会にそれぞれの企業ブースがありますよね。今ではいろんな店のパンが凄くブームだけど、当時の説明会でパンの会社のブースが大行列で。「パン職人」だったらまだ理解できるけど、大学で全然違う勉強をして「本当にみんなパンを作りたいの？」という疑問と、その会社の説明を聞きたい人がこんなにいるのだということに驚いて。何だか馴染めないという印象でした。

早見 ある意味では、山中さんが超狭い世界にいたことの裏返しでもありませんよね。
山中 そうですね。その人達は今のパンブームを見越していたのだ、と今なら思えるんです。だから僕はそういうことに対して、「どこまでもドア」の世界にいたということですよ、きっと。それと、大学の先輩から「絶対内

早見 これは自分も含めてですが、あの頃「将来、役者になるから」「小説家になるから」と、それを言い訳に何もしない輩がゴロゴロいたじゃないですか？ ある種、僕らはその「成れの果て」というか。幸運にもそこに至れただけであって、同じようなことを言っていた人間はごまんといました。正直、僕自身あの頃は「文章を書き

て生きていく」とか言いながら、そこにリアリティはなかったと思います。新聞記者の内定をもらった時だけ、どうにか「文章で食べていける」と思いましたが、自分が小説家になって45歳を迎えるとは正直全く思っていませんでした。山中さんは食べていけるといふ確信はありましたか？

山中 そんなの今もありませんよ。早見 そういう意味では同じです。話は前後しますが、つまり僕たちは宙ぶらりんで大学を出るわけです。僕は宙ぶらりんで中退していますが、あの頃に思い描いていた46歳の姿が仮にあったとして、その時にイメージしていた所より今の自分は確実に上にいるんです。それなのに、なぜだかまったく満たされていないし、常に焦っているし、あいかわらず欲張りだし。でも、あの頃の「こんな風になれたらいいな」より絶対上になりますよ、僕たち。山中さんなんて、演じることで家族を養っているのですよ？

山中 本当にそうですよ。何かをやり始める時のエネルギーや「やろう」と決意すること自体は素晴らしいと思うのですが、それ以上に継続していくのが難しい。モチベーションを維持す

ることも難しいです。常に自分を更新させたいと思っているし、それが続けられていることは素直に有難いですよね。

早見 30歳近くになった頃かな、逆恨みもあるかもしれません、就職して立派にサラリーを稼いでる人達から「お前、何やってるの？」という視線にさらされたことがあります。僕は本当にお金がなくて、そのせいで友人の結婚式に出られなかったこともあって、あの時の卑屈な気持ちは結構忘れられません。そこで心が折れていてもおかしくなかった、そんなことが何度もありました。山中さんは大学を出てすぐに軌道に乗ったんですか？ そもそも事務所にはすぐ所属できましたか？

山中 いや、できなかったですね。25歳で現在の事務所に入りました。それまでは自分達の劇団でやったり、あとは「客演」といつて別の劇団にゲストで呼ばれたり、商業っぽい大きな規模の舞台にちよつとの役で出させてもらったりとか、とにかく舞台をやっていましたね。

早見 その頃、演じることでどれくらい収入があったのですか？

山中 チケットの「ノルマ」があるの

で赤字ですよ。当然、食べてなんていけなかったです。

早見 焦りとか不安はなかった？

山中 ありました。でも僕にとつてのアドバンテージは実家が東京だったという事です。家賃がかからなかったんで、必死にバイトをする必要もなく、その分芝居に時間を費やせたのは有難かったです。

早見 何歳まで実家に？

山中 実は僕はひとり暮らしの経験がまったくなくて。気づいたら誰かの家でお世話になっていたという感じでした。ヤドカリみたいな感じだったというか。

早見 つまり、その時々の恋人の元へ……(笑) 僕もねえ、男女限らずですが、似たようなことをしていました。あの頃に世話になった全ての人に感謝しています。現在の事務所に所属してからは、役者としては回るようになったんですか？

山中 そうでもなかったですよ。最初のうちはとにかくCMのオーディションの日々でしたね。大学の演劇サークルから小劇場で教をこなして、そのまま俳優になるという人間をオーディションで起用することが多かったんで

す。いわゆるタレントさんが商品を見せるCMもありつつ、そうではない、ちょっと変化球みたいなCMの方が作家的が高かったりして。クセのある監督たちに呼ばれていました。

早見 古いCMを紐解くと、山中さんが出ていたりとか。

山中 そう、出ていたりします。たとえば、田村正和さんがメイソンのエプソンのプリンターのCM。(https://www.youtube.com/watch?v=UIN2nJOt28M&t=148s) CMのギャラは当時の僕にはすごく有難いお金でしたから、嬉しかったのを覚えています。

早見 自分で観た時はどんな気持ちでしたか？

山中 どうだったかなあ……。ただ背中だけ(?)だったのでそんなに誇らしくはなくて、悔しきの方があつたかもしれません。その後、携帯電話のCMで、何故かひとり腹筋をしているCMに出たのは結構自慢したかなあ。

早見 僕はまだ「もうこれで安泰だ」と思えたことがないですけど、山中さんはどこかで「いける」と思った瞬間ってありましたか？

山中 うーん……。先程の『松ヶ根乱

射事件』とか、そのあたりから業界内で山中崇という俳優の存在を知って下さった方は増えてきたと思います。でも、世間に広まるという意味では、やはり朝ドラは大きかったですかね。『ちそうさん』に出演した時に「反響」というものを知りました。室井幸齋という役でしたが、地方に行った時に「あつ、室井さん」と声をかけられることが多かったです。

早見 27歳の『松ヶ根乱射事件』から35歳の『ちそうさん』までも、コンスタントにいろいろな作品に出ていたでしょう？

山中 仕事は続いてはいましたが、まあ、思うことは沢山ありました。もつと役と一緒に過ごす時間がほしいとか、もう少し長く関われる役をやりたいという思いは当然ありました。そんな折『ちそうさん』の作家の森下佳子さんが、インタビューで「本を書いていて室井さんのシーンになると、室井さんがここに現れて勝手にしゃべりだすよね」という風に答えてくれたのが本当に嬉しかった。やっていけるということに繋がるかは分かりませんが、自分がやることでこれだけ影響を与えられることができると、と強く感じま

したね。

早見 そういう特性のある役者ですよ、ね、山中さんは。

山中 そうであつたら嬉しいですね。

早見 最近出演された『VIVANT』はドラマ自体がすごく話題を呼んで、かつアリというすごくキャッチーなキャラクターで出ていました。アリ以前とアリ以後の街の人の空気が違うと隣にいる僕は感じるのですが、ご自身はどう捉えているのでしょうか？ 例えば小さい作品で主演をやるのと、大きいバジェットの作品で脇役をやることの違いというのはありますか？

山中 やはり、いくら素晴らしい小説を書いても読まれなかつたら……。ということと同じだと思います。僕は「俳優」という仕事をやっている以上、より多くの人に届いてほしいという気持ちを持っていきます。そういう意味では、たとえ脇役であつたとしても、広く観てもらえることは純粋に嬉しいですね。ただ、早見さんの言う「空気が変わった」という感覚は自分にもあるのですが、一方では醒めている自分もいて。「人はすぐ忘れる」と思っているのです。少し違いますが、先日ある旅番組で、陶芸部の高校生と一緒に

陶芸をする企画で岐阜多治見の学校に行つた時、高校球児が陶芸部まで案内してくれたのですが、途中で「え、芸能人なんですか？」と尋ねられて。ああ、『VIVANT』のアリは岐阜多治見の高校生には届いてないな、と思う冷静な自分がいました。勘違いしてしまうこともあると思いますけど。

早見 人気とか知名度ってある種の魔力ですよ。

山中 アリに関して言えば、「頑張つたね、ちゃんと成仏してくれたね」と思うようにしています。そういう意味では「報われたな」と思いますし、どんな役であれ、今できる全力で挑みますが、やっぱり「成仏」という言葉が一番しつくり来ますかね。彼らの人生をきちんと全うしたいという想いが強いんです。

早見 よく分かります。言い方は悪いですが、世間の人には山中さんを「脇を固める人」として見ていると思うのですが、僕は山中さん自身がそこに甘んじている気がしません。僕もそれこそ山中さんを『VIVANT』で主演を張る俳優になるべきだと思ってるし、会うたびに「早く役所広司になつてくれ」と伝えているんですよ。僕の原



対談を終えて

作でそういう日が来るとしても幸せだし、「これからも一緒に年を重ねていきたいな」と思わせてくれる稀有な俳優さんなので期待しています。

山中 ありがとうございます。

早見 ところで、高校時代に「キジムナー」を一緒にやった仲間達は、現在の山中さんをどう見ているんですか？

山中 さあ、どうなんでしょうね（笑）同窓会などには1回も行っていません、高校生の時はなるべく隅の方で生きていきたい人間だったので。普通の仕事とは違って珍しいから、同窓会では絶対に僕の話が中心になるような気がして。昔を懐かしんだりするいい時間を、僕に費やしてしまうのが申

し訳ないと思ってしまうのです。大して面白いことも言えないだろうと思うとなかなか行けなくて。

早見 それはそれで自意識過剰（笑）

山中 全く見向きもされなかったら何だか腹立つし（笑）

早見 でも、キジムナーの台本を書いてくれた方こそが、ある種「俳優・山中崇」の生みの親じゃないですか。い

つかお札を言いに行かないと。

山中 そうですね。石井さんという方

「待って待って、雪が降ってからの方がいい」が、第一声です。

早見 （笑）逆に10年後、20年後の夢は？

山中 現役でいること、ですかね。本

当にこれは苦しいのですが、常に目の前に壁があるので。それは「自分」という壁のような気もしていて、乗り越えたい自分が目の前に立ちはだける。現役で居続けるということは、10

年後も20年後もそいつと戦わなくては

いけない。嫌だなと思う反面、どこかでそれを楽しみにしてる自分もい

て。だからこそ「まだ続けたい」と思

えているのかもしれない。自分を更

新するというのはきつとそういうこと

だから。苦しみながらも向き合ってい

きたいです。俳優を続けたいから、常

に、手を抜こうと思つたら手を抜いて

向き合えるけど、その先の20年は広

がっていないという感覚は僕にもあり

ます。そこが僕達が共有している大き

な所ですかね。せつたくなので「カレー

マイスター」の資格の話も聞いておき

スリランカなどで「アーユルヴェーダ」と呼ばれている「予防医学」というものを知り、スパイスや漢方に興味を持ちました。『ごちそうさん』の撮影で

10か月程、東京と大阪を行ったり来たりしていた時に、大阪でこの辺りはス

パイスカリーの激戦区と教えられたの

です。「スパイスって漢方のことだよ

なあ」と思ってスパイスカレー屋さん

に行つたらそれが美味しくて。「美味

しくて体にいいならこんないいこと

はない」と、そこからカレーにはまり

ました。

早見 体調はよくなりましたか？

山中 劇的に良くなったかどうかは分

からないけど、普段何を食べるかすこ

く気を遣つてた時期だったので、大した理由ではないですがどうせなら摂つてみようかと。

早見 山中さんのお薦めのカレー屋を訊くと、ホントに一筋縄ではないかな